ふるさと

みのおのおいたち その5

箕面地区(一)

この地区は、明治二二年四月一日に、平尾（今の箕面）・西小路・桜・牧落・新稲・半町・瀬川の七カ村が合併して誕生した箕面村の後身です。

村名は、古い時代から有名な箕面山（箕面寺と箕面滝）を村内に擁したことから、箕面村と称しました。

この箕面の名称を知ることができるのは、後白河法皇の命で平安時代に流行した雑芸歌謡を集めた『梁塵秘抄』に収められた次の歌です。

〝聖の住所はどこどこぞ、箕面よ勝尾よ、播磨なる書写の山、出雲の鰐淵や日の御崎、南は熊野の那智とかや（後節は略）〟

ここに詠まれた箕面（滝安寺）・勝尾などの諸寺院は、平安時代に盛行を来たした浄土教信仰の霊地となり、念仏によって往生を願う「聖」たちが集う、全国でも有名なところでした。

こうした箕面山の南に広がる平坦地域は、箕面川がつくり出した扇状地で、そこには平尾などの集落が所在しました。この地に人が住み、歴史の営みが始まった時代は一世紀ごろであることが、近年、見つかった遺跡でわかっています。とりわけ町田・池ノ内の遺跡調査で、この地に五世紀ごろ「ムラ」があったこともわかっています。その跡地を含む東南一帯、つまり平尾・西小路・桜・牧落の地域は、九二七年「延喜式」にみえる「豊鳴牧」地で諸国から貢上された馬牛が放飼されたところです。牧自体は南北朝期を境になくなりましたが、かわって中世農村の「牧村」が登場し、新しい時代が訪れました。この地が江戸時代に牧之庄と言われ、牧落の地名は歴史を語る一証です。

また、この地の南部を東西に走る旧道は、かって京と九州の太宰府を結んだ古代の官道「山陽道」で、この大路にそって発展したのが瀬川と半町です。とりわけ瀬川は鎌倉時代の勝尾寺文書や「梅松論」・「太平記」にみえる『瀬河宿』の地で、早くから交通の要地でした。

一方、西部の丘陵台地には、延喜式内大社の阿比太神社が鎮座し、社地をとりまく形で台地の各所には数基の後期古墳が遺存しています。今のところ市域では唯一の古墳所在地です。このような或る種の聖域に所在するのが新稲です。近世初頭の元和年間に、現川西市加茂出身の吉田氏を開発主として創設された村です。

近年では、この新稲地域と瀬川縄文遺跡で知られる千里丘陵斜面の随所で、旧石器時代から弥生時代にかけての遺物が採取されています。原始の時代人にとって良好の住地であったのでしょう。

次回からは、順を追って地区の時代相を紹介します。